

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520610

研究課題名（和文）

大学における海外長期留学プログラムの総合的アセスメント研究

研究課題名（英文）

A comprehensive assessment of an academic year abroad program for university students

研究代表者

八島 智子 (YASHIMA TOMOKO)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：60210233

研究成果の概要（和文）：

本研究においては、大学生の1年間の留学成果として、英語教育学、社会心理学、コミュニケーション学の観点から総合的なアセスメントを行った。その結果、客観テストにより留学の前後で英語力が有意に上昇することを確認した。また、異文化の相手に対するオープンな態度、国際問題への関心、困難があってもあきらめないなどの自己効力観において向上が見られ、会話の持続や参加などに関わる対人コミュニケーション能力も高まっていることが認められた。学生自身の記述やフィリピンの大学におけるプログラム事例についても報告する。

研究成果の概要（英文）：

This study made an assessment of an academic-year-abroad program for university students from the perspectives of English education, social psychology and communication studies. Using a pre-post test design, it was revealed that students improved in their English competency as assessed by standardized tests, became more open vis-à-vis intercultural partners, and enhanced international awareness. They also made significant growth in self efficacy and social skills as assessed by psychological scales. Student voices as well as an evaluation of a featured program in the Philippines are presented.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：海外留学・外国語学習・異文化適応・ICT・第二言語習得

1. 研究開始当初の背景

文部科学省による「英語が使える日本人」の育成のための行動計画の発表を受け、英語力と国際性を備えた人材の養成が急務とな

っている。その一環として、日本の各種教育機関において、海外研修プログラムが教育活動の一部として取り入れられてきた。特に最近の注目すべき動きとして、海外の大学との

連携をはかり、1年間の留学を義務付け取得した単位を卒業要件に含めることで4年間の卒業を可能にする試みが一部の大学で始まっている。しかし、始まったばかりということもあり、こういったプログラムを総合的に研究・評価する試みはまだ行われていない。この研究・評価に際しては、留学の意義が外国語の習得にとどまらず、アカデミックスキルの向上、国際的視野と異文化対応力など多岐にわたるため、広い視野をもって学際的にアプローチする必要がある。この点を踏まえ、本研究では、英語教育、社会心理学、コミュニケーション学などの複数の学問的知見を結集した。

2. 研究の目的 外国語教育学的観点

- (1) 留学を通して英語力のどのような側面が強化されるのか、どのような能力やスキルをもった学生が海外の大学での学習に適応し、成果をあげることができるかを分析する。
- (2) 留学中の学習方法の変化を調査し、留学中に英語力を向上するための自律的な学習戦略と、その指導法についても検討する。

社会心理学・コミュニケーション学的観点

- (3) 留学を通して、学習動機や態度、外国語でコミュニケーションをはかる意欲や自信、コミュニケーション不安などにどのような変化が見られるかを測定する。さらに順調な留学生活にどのような個人的社会的要因が関連するかを調査する。

実践応用的観点

- (4) 上記のアセスメントに基づき、留学の準備や教育のありかた、留学中の支援についての提案を行うことを最終目的とする。

3. 研究の方法

事前事後調査

- (1) 英語標準テスト、英語能力自己評価な

どを含む英語力測定 (2) 異文化への態度、国際的志向性、ソーシャル・スキル、自己効力感などに関する側面を中心とした質問項目と、(3) 学習動機・学習ストラテジーなどに関する質問項目からなる質問紙調査を留学前後に実施した。

中間調査

異文化においてどのようなソーシャル・サポートが得られるかと、異文化適応状況を調査するための質問紙を第1コホートについて実施した。

留学中継続的調査

留学中に1) 英語学習方法に関して、2) 異文化への気付きについて、毎月2回の記録をインターネット上のサイトに提出を求めた。

調査対象

英語圏へのスタディ・アブロードに参加した大学生、第1コホート120名と、第2コホート160名とする。

4. 研究成果

(1) 英語力

英語標準テスト (TOEFL) による英語力が留学前後で統計的に有意に伸びていることを確認した。標準試験を構成する3セクションを見ると、リスニング、文法・構文、においては有意に伸びているが、読解のセクションでは有意差が認められなかった。

英語能力自己評価 (CanDo) テストにおいては、逆に自己評価が有意に下がっていた。客観テストによる英語力が伸びていることと合わせて考察すると、自分の能力を厳しく評価するようになったと言える。自分の英語力に自信があり、やや楽観的であった留学前と比べると、思うようにコミュニケーション

が進まない状況に直面したということもあるが、メタ認知能力の発達により厳しい冷静な評価をしたものと考えられる。

(2) 異文化への態度・国際的志向性

異文化への態度を中心とした調査においては、多くの側面で統計的に有意な変化が認められた。異文化への接近・回避傾向では、「日本に來ている留学生や外国人ともっと友達になりたい」「外国人の世話をするような活動に参加したい」「留学生や外国人の学生と寮やアパートでルームメートになってもよいと思う」などの傾向が強まっている。国際的な問題への関心も有意に変化し、留学前よりも「外国に関するニュースをよく見たり、読んだりする」「国際的な問題に強い関心がある」という傾向が高まっている。一方、積極的に自分から進んで英語でコミュニケーションを取る傾向(willingness to communicate)には有意な変化は見られなかったが、世界の人と話すことがある、国際的な問題について意見をもっている、世界に向かって主張したいことがあるとする傾向は有意に高まった。他の調査項目のなかで、国際的職業への関心、エスノセントリズムにおいても変化は見られているが、有意水準に達していない。

(3) 職業観の変化

途上国での支援活動への興味、国際ボランティア活動、青年海外協力隊への興味を問う項目群への回答を分析したところ、こういった活動への興味は有意に高まった。また職業選択において重要視することを選択させたところ、統計処理は行っていないが、「英語(中国語)を使える仕事」がやや低下する一方「国際的」な仕事への志向性は上昇すると言う傾向が見られた。

(4) 自己効力感・ソーシャル・スキル

「自分が立てた計画はうまくできる自信がある」「困難があってもあきらめない」、「友人を自分から積極的に作れる」などの内容を含む23項目(成田他, 1995)を留学前後で実施した。これによると、留学後の自己効力観は、留学前と比較し、危険率1%水準の有意差をもって、上昇していた。また、青年のソーシャルスキル指標として代表的な菊地(1994)による18項目の調査においても、留学後の水準は、留学前と比較し、危険率1%水準の有意差をもって、上昇していた。この指標に含まれるのは、人と話していて会話が途切れない、知らない人とでも会話が始められる、自分の感情や気持ちを素直に表現できる、他人にやってもらいたいことをうまく指示するなどの、コミュニケーション能力である。

これらの調査から、SAによって、若者が対人コミュニケーション能力を身につけ、またそれを中心として自信をもつに至ったことが示された。

(5) 世界市民的傾向

世界市民的傾向(岩田, 1989)から採用した10項目を因子分析し、「世界市民的傾向」と「日本人としての誇り」の二つの要素からなる事を確認した。この2側面については、いずれも留学前後で有意な変化は見られなかった。

(6) ソーシャル・サポートの形成

留学中間調査として、滞在中にどのようなサポートネットワークを形成しているかを調査し、55人から回答を得た。留学中に出会った重要な人物3人から10人までを選び、その属性を選択肢から選ばせるという方法で調査したところ、サポートを得られる相手

として一人あたり、平均 5.16 と、5 人の人物をあげている。その属性を見ると日本人が 48.5%、滞在国の人は 31.3%、他国からの留学生などが 20.3%となっており、日本人の占める割合がかなり大きいことが伺える。年齢は 10 代と 20 代でほぼ 90%と、同年代の友人が中心である。その相手との使用言語は 41.6%が英語、30.2%が英語・日本語両方と、まずまず英語使用率は高いことがわかる。どのようなサポートを得ているかについては最も多いのが「話相手になってくれる人 (155 人)」「相談に乗ってくれる人 (130 人)」「行動を共にする人 (117 人)」などとコンパニオンシップ的な役割が中心である。

(7) 留学中の英語学習方法に関する報告

毎月 2 回インターネット上のサイトに英語学習方法について提出を求めた。学習上の工夫や成果に関する報告事例を以下に挙げる。

「授業中、現地学生に比べて日本人学生は聞き手になるため、なるべく積極的に発言するようにしている。」「ライティングでは客観的な目線で文章を書く力が要求される。提出前に友人のネイティブ・チェックを受け推敲している。」「ルームメイトとの日常の雑談で自然な会話力を身につけることができた。」「何度も presentation に取り組むうちに人前で話す度胸や聞き手に気を配るといった事が自然と身に付いた。」「休暇中ホームステイに参加し、留学で培ったスピーキング力を使ってリラックスして意見を述べている自分に満足した。」

このように、留学の重要な目標である英語力の向上に向けて、学生がどのような学業面での工夫をしているかについて定期的にレポートを提出させることで、自らの学習方法や成果を確認するメタ認知能力が身につくことが伺える。また留学目的の常時確認と自

己成長の記録を通して将来のキャリア形成にも役立てることができると考えられる。

(8) ケース報告：途上国でのボランティア活動

フィリピンに留学した学生は、必修科目として、奉仕活動と英語学習を融合した学外ボランティア活動 (National Service Training Program) に参加する。事前活動ではニーズ分析、問題点の抽出、プロジェクトの計画立案、実施、モニタリング、活動中のジャーナル・エッセイの作成、事後の活動報告会、リフレクションが行われている。その意義は、文化の異なる社会において、英語でコミュニケーションを取りながらボランティア活動を行うことで、人と人のつながり、社会とのつながりを大切にし、「知」のみでなく「情」にも配慮する全人的教育による責任ある地球市民の素養が育成できることがあげられる。

実際の活動事例としては、コミュニティ活動 (フィリピン家庭、高齢者福祉施設、NGO における家庭訪問とゴミ分別活動、フィリピン学生チューターの補助によるストリート・チルドレンへのインタビュー、植樹活動、近隣フィリピン大学生との交流活動)、漂海少数民族への奉仕活動 (準備講義、ゴミ分別指導) などが含まれる。

参加した学生からは、フィリピンで陸に定着した漂海少数民族へのボランティア・プロジェクトに参加したことで、実際にボランティア活動とはどのようなことを企画し、どのように実践するのかについて一連の手法を学べたことが得難い経験となったこと、今まで貧困に対して上から目線で同情の気持ちを持って見ていたが、多少不便なことはあるが懸命に生きている彼らのたくましい生き方を直接体験できたことで、同情の気持ちがなくなり、同じ人間として何ができるのかに

について考えるようになったこと、座学で得られた知識と実際に自分の眼で確かめたこととのギャップに気づいたこと、などが報告された。

以上が主な結果である。今後このような留学先での状況と適応状況、留学の成果との関係などについてさらに詳細の分析を続ける予定である。日本人の大学生の1年に渡る留学の成果については、総括的に分析した研究はほとんど発表されておらず、貴重な研究成果を提供できるものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①吉田信介 フィリピンにおける留学プログラム～ボランティア活動に焦点をあてて～関西大学高等教育研究紀要第3号 (印刷中)p. 89-94. 査読無し

②Ueki, M., & Takeuchi, O. (2012). Validating the L2 motivational self system in a Japanese EFL context: The interplay of L2 motivation, L2 anxiety, self-efficacy, and the perceived amount of information. *Language Education & Technology*, 49, 1-22. 査読有

③ Mizumoto, A. & Takeuchi, O. (2012). Adaptation and validation of self-regulating capacity in vocabulary learning scale. *Applied Linguistics*, 33, 83-91. doi:10.1093/applin/amr044 査読有

④吉田信介 国際交流におけるコンフリクトの解決スキル関西大学外国語学部紀要第5号 2011, p. 57-63. 査読無し

⑤八島智子 多文化社会を生きる力と英語コミュニケーション 国際理解教育研究センター年報 第6号 宮城教育大学国際理解センター、2011、p. 1-14. 査読無し

⑥Yashima, T. (2010). The effects of international volunteer work experiences on intercultural competence of Japanese youth. *International Journal of Intercultural Relations*, 34, 268-282. 査読有

⑦八島智子 海外研修による英語情意要因の変化：国際ボランティア活動の場合 *JACET Journal*, 49, 2009、p.57-69. 査読有

[学会発表] (計4件)

① Sugita, M. & Takeuchi, O. *Motivational strategy: Its effectiveness and features in the classroom.* The 16th World Congress of Applied Linguistics, Beijing, China. Aug. 25, 2011.

②Yashima, T. *Development of learner autonomy through social learning opportunities.* Research Network Symposium on Learner Autonomy. The 16th World Congress of Applied Linguistics, Beijing Foreign Language University. AILA. Aug. 26, 2011.

③Takeuchi, O. *Language learning strategies for tertiary education: Self-regulation and learner strategies.* Symposium on language learning strategies. The 50th JACET Commemorative International Conference, Seinan Gakuin University, Fukuoka, Japan. Aug. 31, 2011.

④Yashima, T. *Imagined L2 selves and motivation for intercultural communication.* Invited talk at JALT CUE 2011 Conference. Toyogakuen University, Tokyo, July 2, 2011.

〔図書〕（計 2 件）

①Noels, K., Yashima, T., & Zhang, R. (2012).

Language, Identity and intercultural communication. In Jackson, J. (Ed.) *The Routledge handbook of language and intercultural communication*. (pp. 52-66). London: Routledge. (632 pages)

②Yashima, T. (In print). Willingness to communicate: Momentary volition that results in L2 behaviour. In Mercer, S., Ryan, S., & Williams, M. (Eds). *Psychology for language learning: Insights from research, theory and practice*. Palgrave Macmillan. (256 pages)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~yashima/>

<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~takeuchi/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八島 智子 (YASHIMA TOMOKO)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：60210233

(2) 研究分担者

吉田 信介 (YOSHIDA SHINSUKE)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：50230743

竹内 理 (TAKEUCHI OSAMU)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：40206941

(3) 連携研究者

田中共子 (TANAKA TOMOKO)

岡山大学・文学部・教授

研究者番号：40227153